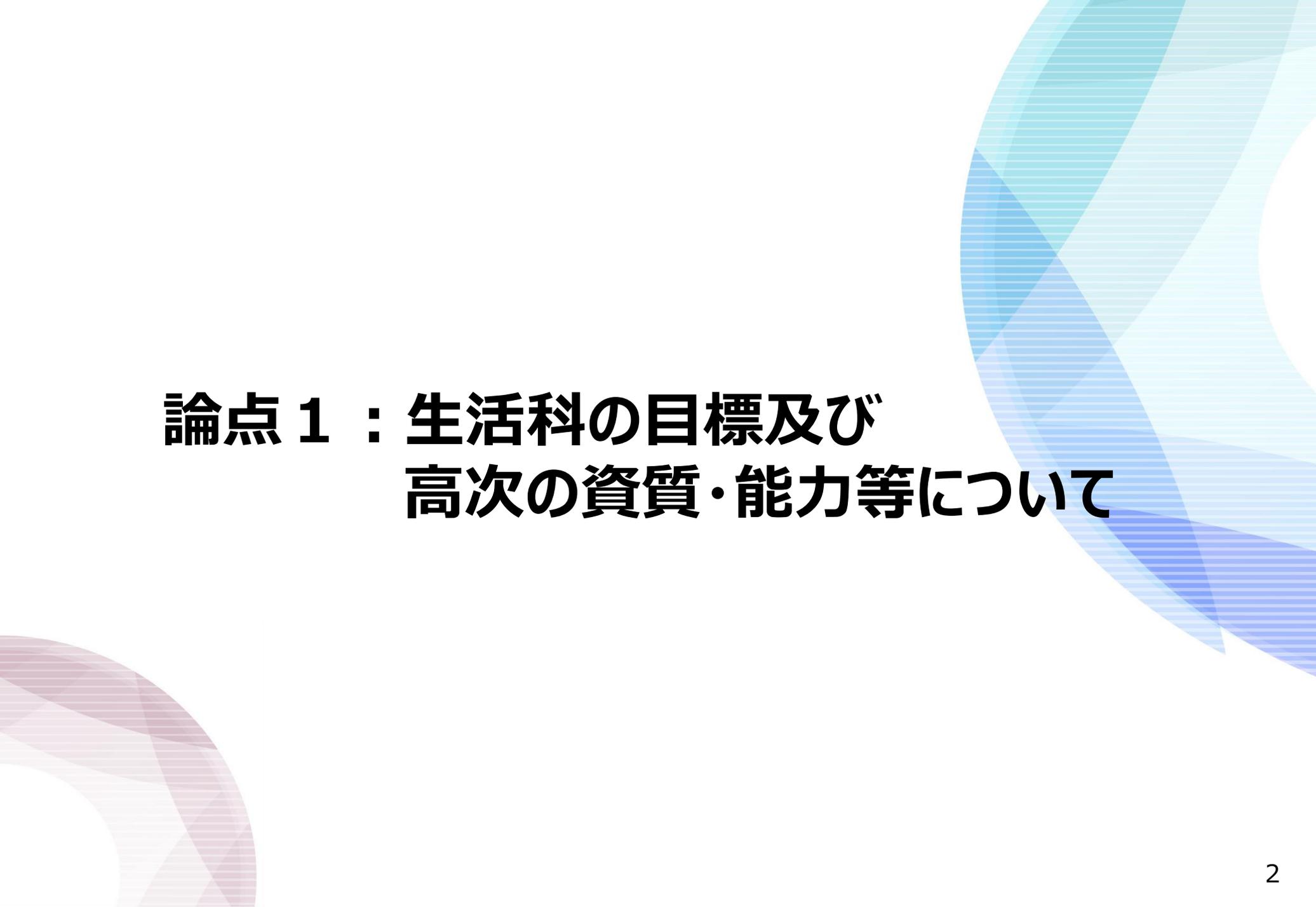


議題  
(1)

# 生活科におけるICT活用等について

論点1：生活科の目標及び高次の資質・能力等について

論点2：生活科におけるICT活用



# **論点 1 : 生活科の目標及び 高次の資質・能力等について**

# 生活科における目標及び見方・考え方（案）

生活科の目標及び見方・考え方については、第4回WGの案を基本としつつ、以下の観点で見直しを行うこととしてはどうか。

## <目標>

学びに向かう力、人間性等において、「学びや生活をより豊かにしようとする態度」としていた表現について、起点が「豊か」であるとは限らないことから、「学びや生活を豊かにしようとする態度」と見直してはどうか。

## <見方・考え方>

第4回WGでは「自分との関わりや、自分と他者との関係の中で捉え」としていたが、「自分」に重複感があることから、「自分との関わりや他者との関係の中で捉え」と見直してはどうか。

※第4回WGからの修正箇所のみハイライト

※下線：現行からの変更点

## 目標

### 柱書

自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<ul style="list-style-type: none"><li>活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴やよさに気付くとともに、<u>他者との関わりを通して</u>それらの気付きを深め、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、<u>気付きや実感を基に自分自身や自分の生活について考えを巡らせ、多様に表現することができるよう</u>にする。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、<u>他者と協働し、状況に応じて関わり方を調整するとともに、意欲や自信をもって、学びや生活を豊かにしようとする態度を養う。</u></li></ul>

## 見方・考え方

- 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりや他者との関係の中で捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする

# 生活科における高次の資質・能力（案）

生活科の高次の資質・能力については、教育課程企画特別部会で示された更なる検討の方向性（P.5～6参照）を踏まえ、特に**わかりやすさ、シンプルさを一層追究**する観点から、以下の修正案を基に、引き続き検討してはどうか。

## ※第4回WGからの修正箇所のみハイライト

	学校、家庭及び地域の生活に関する内容	身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容	自分自身の生活や成長に関する内容
	高次の資質・能力	高次の資質・能力	高次の資質・能力
第4回WG	身近な人々，社会及び自然に親しみや愛着をもち，集団や社会の一員として安全で適切な行動することに向かうように，自分と生活とのつながりを繰り返し考え，多くの人々や場所と関わって成り立っていることへの気付きを深めている。	自分たちの生活をよりよくすることに向かうように，自分と生活とのつながりを広げたり深めたりしながら考え，身近な人々、社会及び自然との関わりが自分たちの生活につながっていることへの気付きを深めている。	意欲と自信を高めながら生活することに向かうように，自分の生活を振り返る中で，これまでの出来事や関わりを手掛かりに，自分の成長や身近な人々の支えについて考え，自分のよさや可能性への気付きを深めている。
修正案	学校，家庭及び地域との関わりの中で，自分の生活が支えられていることへの気付きを深め，それらに親しみや愛着をもって行動できる。	身近な人々，社会及び自然との触れ合いの中で，自分のよりよい生活につながることへの気付きを深め，生活を楽しくしようとするができる。	これまでの生活や学びを通じた自分の成長の振り返りの中で，他者への感謝や自分のよさ，可能性への気付きを深め，意欲的に生活できる。
	内容項目例	内容項目例	内容項目例
	(1) 学校と生活 学校生活に関わる活動を通して，学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達，通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ，学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり，楽しく安心して遊びや生活をしたり，安全に登下校をしたりしようとする。	(4) 公共物や公共施設の利用 公共物や公共施設を利用する活動を通して，それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ，身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに，それらを大切に，安全に気を付けて正しく利用しようとする。	(9) 自分の成長 自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して，自分のことや支えてくれた人々について考えることができ，自分が大きくなったこと，自分でできるようになったこと，役割が増えたことなどが分かるとともに，これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち，これからの成長への願いをもって，意欲的に生活しようとする。
	(2) 家庭と生活 家庭生活に関わる活動を通して，家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ，家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり，自分の役割を積極的に果たしたり，規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。	(5) 季節の変化と生活 身近な自然を観察したり，季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して，それらの違いや特徴を見付けことができ，自然の様子や四季の変化，季節によって生活の様子が変わることへ気付くとともに，それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。	
	(3) 地域と生活 地域に関わる活動を通して，地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ，自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり，それらに親しみや愛着をもち，適切に接したり安全に生活したりしようとする。	(6) 自然や物を使った遊び 身近な自然を利用したり，身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して，遊びや遊ばしに使う物を工夫してつくることができ，その面白さや自然の不思議さに気付くとともに，みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。	
		(7) 動植物の飼育・栽培 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ，それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに，生き物への親しみをもち，大切にしようとする。	
		(8) 生活や出来事の伝え合い 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して，相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ，身近な人々に関わることのよさや楽しさが分かるとともに，進んで触れ合い交流しようとする。	

# 資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性（案）

- 各WGにおける資質・能力の構造化の検討状況を一覧化し、本部会の論点整理で示した資質・能力の構造化の趣旨や、総則・評価特別部会で整理したチェックポイント等を踏まえ検討したところ、以下1～7については共通して精査を要するのではないかと
- ✓ これら以外に、各WGに対して個別に指摘すべき事項や、各WG共通で検討を要する事項はないか
- ✓ 本日の議論を踏まえて、引き続き総則・評価特別部会や各WGにおいて資質・能力の構造化の具体についてさらに検討を深めることとしてはどうか

## 1. 資質・能力の深まりの可視化

- 今般の構造化を通じ、「深い学び」が実現したイメージを教師が具体的に持つことができるようにすることが重要。（【資料1】P6 総則・評価特別部会「チェックポイント」B関連）
- こうした視点で見た際に、抽出された「高次の資質・能力」のうち特に「統合的な理解」については、依然として個別の知識及び技能が不足なく身に付いた状態を「要約」して示すに留まっているものも見られる。
- 個々の知識・技能が単に網羅されているかではなく、「指導を通じて学びが深まったときの児童生徒の姿をイメージできるような確に示しているか」といった観点から、各WGで記載を見直し、個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、「統合的な理解」となった児童・生徒の姿を描き出せるよう更に検討すべきではないか。

## 2. 分かりやすさ、シンプルさの一層の追究

- 「深い学び」を実現する具体的なイメージを持つことができるようにするためには、学習指導要領の記述が、教師にとって分かりやすく、学校を通じて保護者や地域住民等に伝えやすいものであることも重要。（【資料1】P6 総則・評価特別部会「チェックポイント」D関連）
- こうした視点で見た際に、整理されている「見方・考え方」や「高次の資質・能力」の中には依然として記載が冗長であったり、理解が難しい用語を用いて表現されているものも散見される。
- 各教科等の本質や育みたい資質・能力を十分に表現可能な範囲において、解説との役割分担も含め（教科等の本質的な意義に焦点化できているかという視点から精査）、一層分かりやすくシンプルに示すことが可能かどうか、引き続き各WGで検討してはどうか。

## 3. 「高次の資質・能力」を踏まえた個別の資質・能力の精査

- 総則・評価特別部会においては、「高次の資質・能力」の全体を暫定的に整理した後、それらを基に各教科等WGにおいて個別の資質・能力の検討を行う際の方向性として以下を示した。（【資料1】P7）

「各教科等WGにおいて、整理した「高次の資質・能力」に基づき、より豊かな学習活動に繋がり、かつ、系統性等を損なわない範囲で、精選が可能な対象を慎重に特定しつつ、個別の資質・能力の整理を検討する。その際、表形式での示し方、「高次の資質・能力」の獲得に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための余白が十分にあるか」といった視点からも検討」

- 今後、上記の方向性に加え、下記の留意点も踏まえつつ、各教科等WGで個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を進めてはどうか
  - ✓ 暫定的に現行学習指導要領の内容に基づき、高次の資質能力を整理してきたWGもあることから、今後の検討にあたっては、現行の指導内容が全て等しく重要であると安易に判断しないように留意する必要
  - ✓ 個別の資質・能力を検討していく中で「高次の資質・能力」の在り方についても往還しながら更に改善を図っていく必要

## その他「高次の資質・能力」での構造化に当たり留意すべきポイントについて

### （「高次の資質・能力」について）

- 単学年ごとに「高次の資質・能力」を示している場合などで、「高次の資質・能力」が個別の内容事項と近接してしまい資質・能力の深まりが示せていないものもあり、そういった場合は複数の「高次の資質・能力」をまとめて水準を上げることも考えられるのではないか
- 特に「総合的な発揮」については、学びの成果として達成して欲しい姿として重要であると同時に、学習過程において、状況に応じて思考力・判断力・表現力を選択したり組み合わせたりしながら、繰り返し発揮される中で育成されていく側面を有するという視点も踏まえた示し方とすべき（一方、学習過程自体を記述するものではないことに留意が必要）
- 「高次の資質・能力」については、深い学びを実現する授業のイメージを教師が持てるようにする視点に加えて、児童生徒の多様性を包摂する授業づくりを進めるために活用するという視点も重要。このため、児童生徒の多様性を踏まえた多様なアプローチが許容されるものとなっている必要があり、そのためにも、特定の活動を想起させる狭い記載ではなく、できる限りスリムで骨太な記載とすべき

### （学校段階の特性を踏まえた共通性の確保について）

- 多くの教科を指導する小学校の教員から見ると、教科間の記載にばらつきが大きすぎると理解が進まない恐れ。各教科等の特性を踏まえつつも、各学校段階では一定の共通性を持って見られるよう抽象度の高さを含め一定の平準化が必要。他の学校段階や他教科等の表現も参考にしつつ、当該学校段階の発達段階を踏まえた「深い学び」の姿を具体的にイメージできるようになるかという共通の視点をもって検討が必要

### （資質・能力の3つの柱の性質を踏まえた整理について）

- 並列パターン、並行パターンといった形式上の違いはあれど、資質・能力の整理は本質的なところで共通している必要。特に「思考力・判断力・表現力等」については、これまでに習得した知識や技能を活用して、実社会・実生活などの場面を想定した課題解決に近い形で資質・能力を発揮するという性質の柱であり、「知識及び技能」とりわけ技能との適切な整理が必要。「学びに向かう力・人間性等」は「思考力・判断力・表現力等」の中で見取る方向で検討していることも踏まえ、異なる整理をしている教科においては、引き続き検討が必要

#### 4. 今般の構造化を単元・授業づくりに活かすプロセスの可視化

- 「高次の資質・能力」を基にした今般の構造化・表形式化は、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」について学びの深まりを可視化するとともに、それらを一体的に育成する学習の在り方を示し、教師一人一人が「深い学び」を具現化しやすくすることを目指すもの。
- 一方で、整理・構造化された資質・能力について理解を深めること、それらを活用して実際の単元・授業づくりに活かすこととの間には依然としてギャップがあるものと考えられる。「資質・能力」の深まりを捉えた後、それを実現する単元・授業をどのように構想し、実践に繋げていけばよいかを考えることは、特に経験の浅い教師にとっては、難しい場合もある。
- そのため、構造化・表形式化する学習指導要領について、単元・授業づくりのどういった場面でのどのように活用することで授業改善に繋げていくことができるのか、各教科等ごとに参考イメージを示すことにより、指導主事や経験が豊かな教師が、経験の浅い教師を指導する際のイメージを共有できるようにすることを検討してはどうか。 (補足イメージ参照)
- ※ このことに関わって、前回改訂時の中教審答申においては各教科等固有の「深い学び」を実現する学習過程を精緻に示す試みが行われたが、多くの要素が盛り込まれ、教科等によっては複雑で実現が難しいものとなったとの指摘もある。また今般、個別最適な学びの実現の観点も踏まえ、「個に応じた学習過程」の充実を目指すこととしている。これらを踏まえると、今回は単一の学習過程を整理するのではなく、子供一人一人が深い学びを実現するための専門職としての教師の多様な単元・授業づくりを支えるという視点から、上記のように、構造化・表形式化された学習指導要領の活用イメージとして、参考資料を示すことが適当ではないか。
- ※ その際、このイメージはあくまでも参考の一つとして示し、現場の実践を過度に縛るものにならないよう留意が必要。実践者が子供の実態を踏まえて、多様で豊かな単元・授業づくりを行う際の足掛かりの一つと位置づけてはどうか。

#### 5. 用語の一層の整理・検討（高次の資質・能力）

- 企画特別部会では、今回の学習指導要領の一層の構造化の核となるものとして、「知識及び技能」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思考力・判断力・表現力等」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んで整理していたところ。
- これらの用語について、総則・評価特別部会では、新たな用語が増えることを避け、一人一人の教師が現行の学習指導要領の延長線上に今回の構造化を理解することができるようにする観点から、資質・能力の深まりを示すものを「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」、それらをまとめて「高次の資質・能力」と呼ぶことと整理した。 (【資料1】P3参照)
- 「統合的な理解」「総合的な発揮」の呼称については、今回の構造化の趣旨の理解を進める上で効果的に働いている一方、「高次の資質・能力」という語については、各教科等WGでは、学校現場には単に「レベルの高い高度な資質・能力」として受け取られる等の誤解を招くのではないかといった懸念もあつたところ。
- こうしたことも踏まえ、「高次の資質・能力」という用語については、今回の構造化を検討・議論する上の「足場」としては重要であり引き続き使用することしつつも、実際に学習指導要領を告示する段階に向けて、更に適切な語があればそれを用いることとするか、または告示文の中ではあえて用いない（「統合的な理解」「総合的な発揮」のみで説明）こととしてはどうか。

## 6. 趣旨を実現するための教科書の在り方の更なる検討

- 企画特別部会の論点整理においては、今般の構造化の趣旨を踏まえて教科書の内容は「統合的な理解」「総合的な発揮」をつかみ取りやすくなるものに精選していくとともに、その分量の在り方に関しては、調整授業時数制度の下で、調整後の時数で十分に指導可能なものとなるよう検討すべきとの方針を示している。
- 一方で、教科書会社からは、そうした「高次の資質・能力」をつかみ取りやすい教科書は具体的にどのようなものかイメージが湧きにくいという声もあり、総則・評価特別部会においては、各教科等WGにおいて「高次の資質・能力をつかみやすい当該教科等の教科書の在り方について、内容の精選の在り方も含めて検討を行う」方針が示されているところ。（【資料1】P7）
- これらの方針を踏まえつつ、各教科等WGにおいては、
  - 3. に示す個別の資質・能力の整理と必要に応じた精選の検討を着実に進めていくとともに、
  - 「高次の資質・能力をつかみ取りやすい単元・授業づくりに資する観点から、現在の教科書のどういった内容を精選対象とすることが考えられるか、またどういった構成上の工夫が考えられるかといった点についてのアイデア出しを行い、教科書会社における教科用図書の編纂の参考となるよう検討を進めることとしてはどうか。
- 中央教育審議会におけるこれらの検討状況も踏まえつつ、調整授業時数制度を活用して標準を下回って時数を設定した後の授業時数でも、教科用図書の内容を適切に取り扱った指導が可能となるような教科書編纂を促すための仕組み作りなどについて、検定調査審議会において具体的に検討することとしてはどうか。

## 7. 構造化・表形式化・デジタル化・調整授業時数・個に応じた学習過程の関係性の整理

- これまで、学習指導要領の構造化・表形式化と、デジタル化、調整授業時数制度をはじめとする柔軟な教育課程編成を促す仕組み、個に応じた学習過程の充実については、それぞれ一定の検討時間を要するものであったため、トピックを分けて具体化の議論を進めて来た。
- もとより、これらの方策はいずれも密接に関連している（※）ものであることから、トピックごとに一定の具体化が進んできた現段階において、相互の関係を改めてしっかりと可視化し、学校現場が一体的に理解できるよう示していくことが重要ではないか。

（※）相互の密接な関連の例

- 「高次の資質・能力」に基づく構造化・表形式化は、各教科等の「深い学び」を実現しやすくするために重要であるだけでなく、各学校が子供の実態に応じた柔軟な教育課程を編成したり、個に応じた多様な学習過程を充実する中であっても、外してはならない教育課程の「軸」を明確化する役割も有している。
- 「高次の資質・能力」で示した教育課程の「軸」をおさえつつ、子供の実態に合わせた柔軟な教育課程を編成・実施していく上では、系統性を確保しながら多様な実践アイデアを練る必要がある。このため、学習指導要領に示された内容を様々な角度から比較・参照して理解することや、データで出力して進捗管理に活用することを可能とするなど、学習指導要領のデジタル化による利便性の向上・活用幅の拡大が効果的と考えられる。
- 多様な子供一人一人に深い学びを実現していくためには、調整授業時数制度を用いて学校レベルでの教育課程を柔軟化することも重要であるが、その先に個々の児童生徒のレベルでの学習過程の質が個に応じたものとして改善していくことが求められる。そのためには、学習方略の指導等を含め、個に応じた学習過程の充実を支える方策の充実が重要となる。
- そのため、今後総則・評価特別部会において、これらの方策がどのように相互に関連しているかを一層明らかにしつつ、その結果としてどのような単元・授業づくりを目指そうとしているのかを取りまとめにおいて可能な限り示していくことが考えられるのではないか。

P.3の「1. 現状と課題、期待される学び」を踏まえ、生活科の**本質的意義を明確にし、それが学校教育において発揮する教育的価値、位置付けを明らかにするとともに、深い学びを実装するための視点として「4つの本質的意義」を体系的に整理する。**

## 2. 生活科がもつ4つの〈本質的意義〉

人間的な学びを実現するために、以下の4つの観点を本質的意義として位置付けてはどうか。

### ① 身体性 — 身体で世界を捉える（実感）

- 対象との関わり方として、触る、動かす、試すなど諸感覚を通して対象を捉えるとともに、単に「分かった気がする」でなく**納得感を伴って「分かった」「できた」という手応え（実感）**を得られるようになる。AIが提供する情報だけでは得られない、「身体で世界を捉える」体験や活動が、自分の外に広がる世界と確かな接点をもつ出発点となる。

### ② 対象と自分との関わり — 身近な世界に働きかけ、気付く（好奇心・探究心）

- 自分が触る、動かす、試すといった働きかけによって、**身近なものごとの様子や変化に心を向けることを通して、身近なものごとが変化することを実感する中で、「自分が動く対象となる世界が変わる」という手応えを得る。**その経験が、「なぜ？」「どうして？」という好奇心や探究心を生み出し、自分との関わりで対象を捉える。
- 児童が自ら世界に働きかけることで、身近な人々、社会及び自然のよさや特徴などに**気付くとともに、それらを身近に感じ、大切に思いながら関わっていけるようになる。**

### ③ 他者と自分との関わり — 他者の思いや願いを尊重し、共に生活する（協働性・共感）

- 他者との関わりを通して、**自分一人ではできないことも、互いに力を出し合うことでできるようになる経験を重ねる中で、相手の思いに気付き、受けとめ、尊重する態度が育まれる。**他者との関わりから生まれる協働・共感の経験は、社会で共に生活するために重要であり、こうした経験を重ねることで、児童の学びは身近な人から地域・社会へと関係が広がっていくことになる。

### ④ 自己認識 — 自分という存在に気付く（主体性・自立性）

- 生活科の学びで、「自分はどう感じるか」「何が**好き**か」「何をしたいか」に気付き、その気付きが、自分で考え行動する主体性や自立性を育む。「自分はこう感じる」「自分はこう考える」からこそ、自分自身のよさや可能性、成長に気付けるようになる。

## **論点 2 : 生活科におけるICT活用**



## 現状と課題

### (1) ICT活用の現状

- 生活科においては、1人1台端末の整備を背景に、体験活動や表現活動の場面でICTを活用する実践が広がっている。
- 具体的には、
  - 学校探検や町探検での写真・動画撮影
  - 飼育活動や栽培活動での動物や植物の変化や成長の記録
  - 発見したことのスライドや写真提示による発表
  - 自然物の名前や特徴を調べるための検索
  - デジタル図鑑の活用
 などが行われている。
- 特に、体験の記録や可視化、表現の手掛かりや方法で活用されることが多く、子供一人一人の思いや願いを実現する手段として定着しつつある。

### (2) ICT活用における課題

#### ① 体験とICT活用との関係の整理が不十分

→ ICTが体験を補助・促進する手段ではなく、活動の一部として目的化する場合がある。

#### ② 感覚的・身体的な関わりと認識の接続が十分ではない

→ 諸感覚を働かせた直接体験で得られた気付きを、十分に認識できていない場合がある。

#### ③ 表現活動の質の課題

→ 写真や動画の提示にとどまり、言語による伝え合い・比較・問い直しが十分に行われない場合がある。



## 改善イメージ

### 1. 基本的な考え方

- 生活科におけるICT活用は、身体性を伴う体験をより一層豊かにしていくためであり、直接体験を代替するものではない。このことを前提とした上で、ICT活用を、生活科の本質的意義をより深化させ、体験・認識・表現の質を高めるための補助・促進する手段と位置付ける。

### 2. 改善の観点

#### (1) 体験の質を高める

- 諸感覚の基盤の上に、撮影・記録によって、時間や空間を超えて、対象をじっくり見たり、様々な視点から観察したりするとともに、改めて対象に関わる活動を取り入れることで、体験の質を高める
- 身体性の深化

#### (2) 認識の質を高める

- 画像や動画の視聴によって、対象を比較したり捉え直したりし、それらを言語化し対話によって考えを巡らすとともに、自分の変容や成長に着目したり振り返ったりすることで、認識の質を高める
- 対象と自分との関わりの深化／自己認識の形成

#### (3) 表現の質を高める

- 音声や画像で簡便にもしくは精緻に表現したり、思いや願いをもって交流したりすることで、表現の質を高める
- 対象と自分との関わりの深化／他者と自分との関わりの深化

### 3. 幼児教育・総合的な学習の時間との接続

- 幼児期の遊びの中で育まれた探究の芽生えを、体験と表現の往還の中で自覚的に育てる。
- 記録・比較・交流を通して生まれる「なぜ」「どうして」「確かめたい」という思いや願いが、総合的な学習の時間における探究へと連続する。
- ICT活用を生活科の本質的意義（身体性・関わり・自己認識）を支え、幼児期から総合的な学習の時間へと連なる学習の質の高まりを促進する学習基盤として位置付けてはどうか。

# 生活科におけるICT活用のイメージ

○ 生活科におけるICT活用は、身体性を伴う体験をより一層豊かにしていくためであり、直接体験を代替するものではない。このことを前提とした上で、ICT活用を、生活科の本質的意義をより深化させ、体験・認識・表現の質を高めるための補助・促進する手段と位置付ける。その結果として、

- (1) 繰り返し関わったり視点を変えたりすることにより、体験の質が高まる（関わりを広げ深める体験）
  - (2) 画像や動画により対象を比較したり、捉え直したりすることにより、認識の質が高まる（気付きの質の高まり）
  - (3) 多様な方法で記録・交流することにより、表現の質が高まる（思いや願いに即した豊かな表現）
- ことへとつながっていく。

## 体験の質の高まり

- ① 諸感覚を働かせながら、撮影・記録を何度も体験する
- ② 拡大したり様々な視点で観察したりしつつ、改めて対象との関わりを深めようとする
- ③ 時間・空間を超えて体験する



体験する

表現する

## 表現の質の高まり

- ① 文字や絵でなく音声や画像で簡便に表現する
- ② 対象を音声や画像で精緻に表現する
- ③ 思いや願いをもち多様に表現したり交流したりする

## 認識の質の高まり

- ① 多くの鮮明な画像や動画によって、対象を比較したり捉え直したりする
- ② 認識したことを言語化し、対話によって考えを巡らす
- ③ 自分の変容や成長を振り返る

# 幼児教育・総合的な学習の時間との接続

- 幼児教育段階におけるICT活用は、乳幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、主に、記録をして繰り返し見たり、詳しく調べたり、表現の幅を広げたり、その場にはいない人とコミュニケーションをとったりするなど、遊びの中で取り入れている。
- また、総合的な学習の時間におけるデジタル学習基盤の活用は、探究のプロセスを支える基盤として位置付けられている。
- このようなことを踏まえつつ、生活科におけるICT活用については、生活科の本質的意義（身体性・関わり・自己認識）を支え、幼児期から総合的な学習の時間へと連なる学習の質の高まりを促進する学習基盤として位置付けてはどうか。

## 幼児教育段階におけるICT活用

- ・記録する
- ・詳しく知る
- ・表現する
- ・やり取りする

## 生活科におけるICT活用

- ・撮影・記録
- ・比較・捉え直し・言語化
- ・表現・交流

## 総合的な学習の時間におけるICT活用

- ・課題の設定
- ・情報の収集
- ・整理・分析
- ・まとめ・表現

### 体験の質の高まり

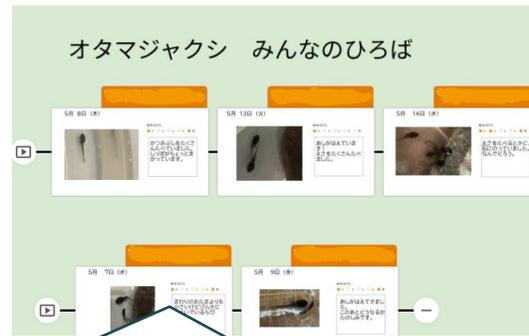
生き物を飼育する中でじっくり見続けることで、「しっぽがだんだん短くなってきた」「足が生えている」と新たに発見する。



- ・写真と実物を見比べて、違いや変化に驚く
- ・ヤゴの羽化の様子を低速度撮影して不思議さを感じる

### 認識の質の高まり

自分が書いた観察カードを手掛かりにして、「上手に世話ができるようになった」と世話を重ねてきたことや、自分の成長に気付く。



- ・デジタル観察カードを活用して振り返ることで、生き物と自分との関わりや自分の変容や成長に気付く

### 表現の質の高まり

自分で実際に世話をしたり発見したからこそ、「友達に見せたい、伝えたい」と思いや願いが高まり、表現したり交流したりする。

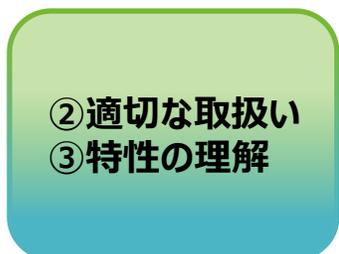
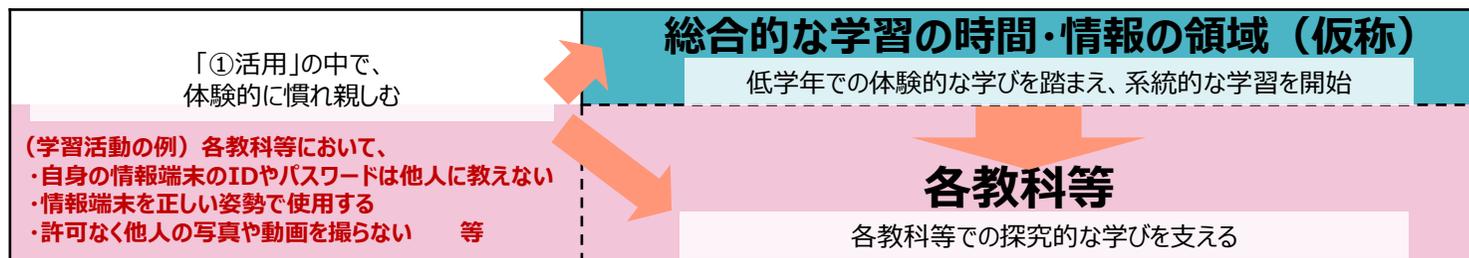
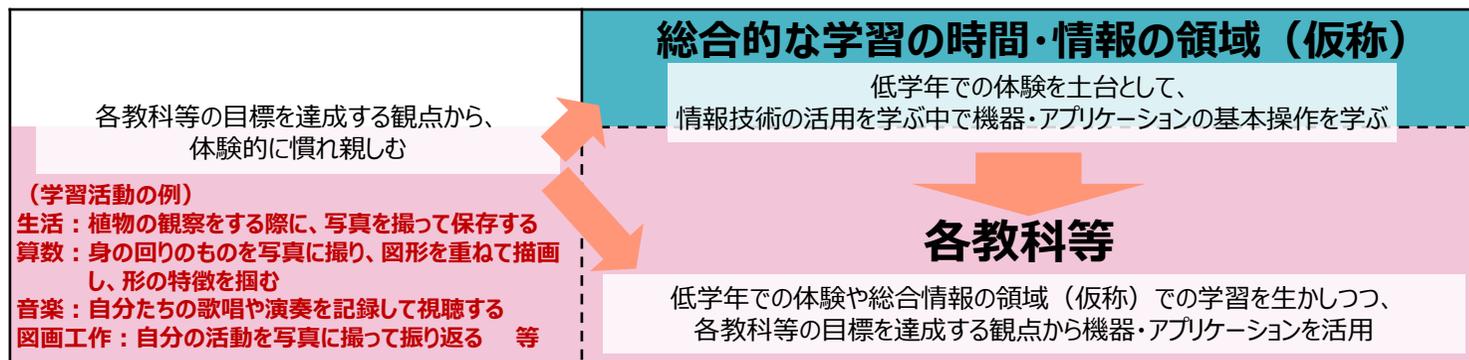
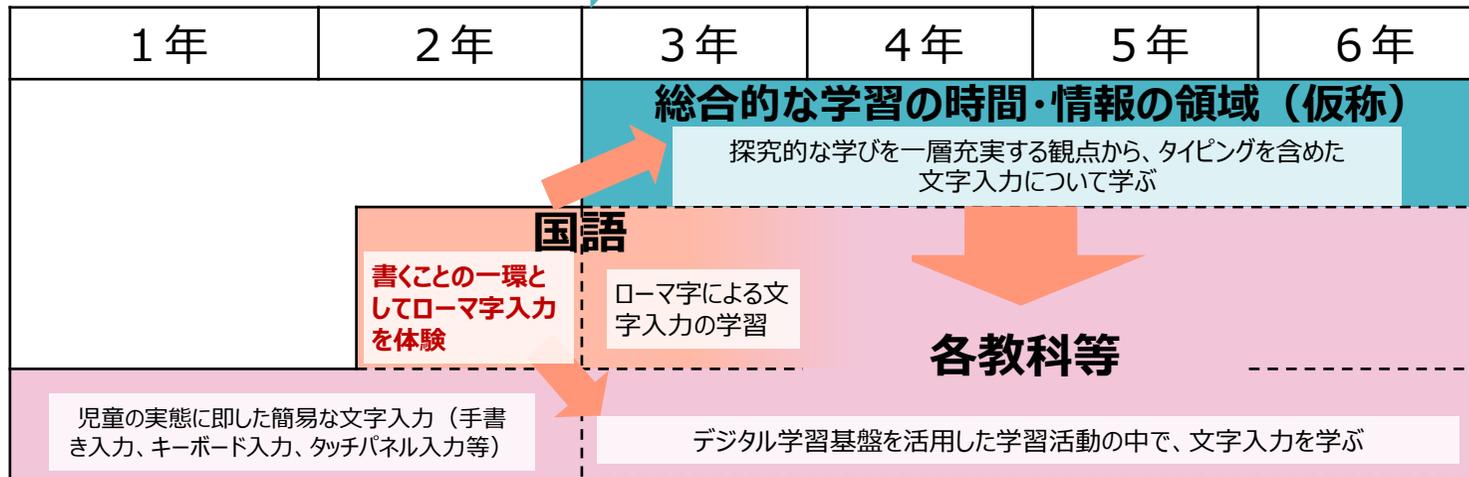


- ・デジタル観察カードを見ながら、伝えたい思いや願いを高める
- ・動画で感動場面を記録し、共感し合う

# 小学校低学年における情報活用能力の育成イメージ

- 「基本的な操作」について、「コンピュータで文字を書くこと」と、「機器・アプリケーションの基本操作」の2つに整理し、各学年における学習活動と中学年以降への展開は以下のような流れとしてはどうか
- 「②適切な取扱い」と「③特性の理解」は、「基本的な操作」の中で体験的に学ぶこととしてはどうか

デジタルに体験的に慣れ親しむ → デジタル学習基盤を効果的に活用する





○ 社会において年々情報化が進展する中、個別最適な学びと協働的な学びを実現する学校教育の基盤的なツールとして、小学校では1年生から1人1台端末等の整備が行われており、幼児教育施設においてもICTを活用した取組 **補足イメージ①** が行われてきたところ。

一方、幼少期からの長時間使用による心身への影響等への懸念も指摘されている。 **補足イメージ②**

○ 幼児教育施設における乳幼児の活動におけるICTの活用については、乳幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、主に以下の目的・用途で行われている。

### <記録する>

- ・記録(写真、音声、動画等)をして友達や先生と共有する
- ・記録をして繰り返し見る

### <詳しく知る>

- ・拡大したり裏側・内側などを見たり、音や声を聞いたりする
- ・情報を探したり、より詳しく調べたりする

### <表現する>

- ・表現活動を行う、表現の幅を広げる(製作物をコマ撮りしてアニメーションにする等)

### <やり取りする>

- ・その場にはいない人とコミュニケーションをとったり、場を共有したりする

○ 一方で、ICTを活用した活動の実施に当たっては、以下のような課題も生じているところ。

- ・乳幼児の発達や活動のねらいに応じた活用となっていない
- ・物理的環境(機器のスペックやWi-Fi環境等)の整備が不十分
- ・不適切なコンテンツ(動画広告や不適切な情報等)の表示
- ・ICTの専門的知見の不足によるトラブル、操作上の問題

◆ 小学校以上においては、児童生徒の端末や通信ネットワーク、周辺機器、デジタル教科書・教材・学習支援ソフトウェア等の要素で構成されるデジタル学習基盤を前提に、各教科等の授業改善のための効果的活用や情報活用能力の抜本的向上に向けて検討が進められている。また、家庭や社会においても、パソコンやタブレット等は日常的に使用されているとともに、幼少期からの長時間使用による心身への影響等への懸念も指摘されている。こうしたICT活用の懸念も踏まえ、要領・指針での示し方について、どのように考えるか。

◆ ICTの活用に当たっては、乳幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、乳幼児の直接的・具体的な体験の充実を図る道具として活用することとしてはどうか。その際、乳幼児の直接的・具体的な体験を阻害する活用とならないよう、どのような点に留意する必要があるか。

### (主な留意点の例)

- ・乳幼児の発達や活動のねらいに応じていない活用
- ・乳幼児の発達にとって望ましくない活用
- ・ICTの操作の習得を目的とした活動
- ・乳幼児を一方向的に指導するための道具としての活用
- ・ICTに指導を委ねるような活用 など

※幼児教育における「情報活用能力」の整理について  
 ・教育課程企画特別部会においては、「情報活用能力」について「情報技術の活用」に絞って示す方針が示されており、また、情報活用能力を構成する要素を、「①情報技術の活用」「②情報技術の適切な取扱」「③情報技術の特性の理解」と整理し、それを踏まえ情報・技術WGで議論を進めているところ。  
 ・乳幼児の発達を踏まえると、幼児教育においては、これら①～③について、ICTを活用する際に体験するものである一方、資質・能力としての育成は目的としないこととする。

# 1. 探究的な学び×ICTの活用で期待できる質の高まり



## ① 課題の設定

多様な課題に出会うことができる  
データ等で課題を明確化し、課題解決の見  
通しを鮮明にできる

## ② 情報の収集

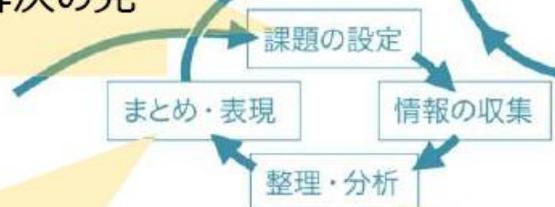
多種多様な大量の情報を、高速に、時  
間や空間を超えて収集・蓄積できる

## ④ まとめ・表現

豊かな表現を短い時間で作成し、広く発信し  
たり、自らの学びを振り返ったりできる

## ③ 整理・分析

多様で大量で複雑な情報の整理や、整理  
した情報の加工・分析が容易になる





## 1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

### (2) 生活科の指導と評価の改善・充実の在り方

- デジタル学習基盤の活用や情報活用能力の育成強化を前提とした、生活科における「主体的・対話的で深い学び」の一層の充実を図るための方策

## 2. 生活科に関する課題を踏まえた固有の検討事項

### (1) AI時代における生活科の在り方に関する検討の方向性

- 生活科の本質と価値を問い直す必要性
- 身体性を重視した、直接体験・多様な表現を行う機会の必要性

### (2) 学びの質と学びの意欲に関する課題と検討の方向性

- ① 学びの質保証（形骸化防止、『深い学び』の実現）
  - 「活動あって学びなし」を防ぐ方策

【参考】現行学習指導要領における記載（コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用）

## 生活科

### 第4章 指導計画の作成と内容の取扱い

#### 2 内容の取扱いについての配慮事項

- (4) 学習活動を行うに当たっては、コンピュータなどの情報機器について、その特質を踏まえ、児童の発達の段階や特性及び生活科の特質などに応じて適切に活用するようにすること。

#### 【解説の記載】

生活科は、児童が身近な環境と直接関わる活動や体験を楽しむことを大切にしており、これらを十分に行わなければならない。こうした学習活動の中でも、コンピュータなどの情報機器を効果的に活用することも必要である。

例えば、アサガオを育てる中で、興味・関心をもったことを自分の言葉や絵などで表現する活動を行う。友達の気付きと比べたり、これまでの成長を振り返ったりする場面では、デジタルカメラやタブレット型端末の画像を活用し、具体的に思い起こすことも効果的である。

また、町探検で見付けたことをデジタルカメラやタブレット型端末で撮影し、教室で発表する活動を行う。画像を大きく映すことで、それぞれの発表したいことや気付いたことなどが伝わりやすくなる。その結果、児童一人一人の発見が共有され、町のイメージを広げていくこと、新たな探検への意欲の高まりなども期待できる。

しかし、低学年の児童の発達の特性は、人、社会、自然を一体的に感じ取り、自分との関わりで捉える傾向がある。また、発達段階的に情報機器の操作に戸惑う児童も多いことが予測される。そうした児童の発達の段階や特性を十分配慮して、計画的に情報機器を取り入れることが重要である。

## 各教科等の指導においてICTを活用する場合の基本的な考え方

＜資質・能力の三つの柱＞

学びを人生や社会に  
生かそうとする  
学びに向かう力、  
人間性等の涵養

生きて働く知識及び  
技能の習得

未知の状況にも対応  
できる思考力、判断力、  
表現力等の育成

新学習指導要領に基づき、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成するため、子供や学校等の実態に応じ、各教科等の特質や学習過程を踏まえて、教材・教具や学習ツールの一つとしてICTを積極的に活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげることが重要。

## 各教科等の指導における1人1台活用事例

Point①

各教科等の特質に応じた活用事例を紹介

Point②

標準仕様に準拠しており、全国の学校において参考とすることが可能

生活

小学校・第2学年 生活

【活用したソフトや機能】

学習支援ソフト、共有ノートブック

野菜を育てる活動を通して、育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって栽培することができ、野菜が成長していることに気付くとともに、おいしい野菜を収穫しようとすることを目指す。

野菜を栽培する中で発見したことや成長の様子を、静止画で記録・保存・蓄積することで、野菜の成長を振り返る際に、児童自身が記録した静止画を時系列で並べることで、変化や成長の様子に気付くことができる。

また、それらの静止画をきっかけにして、土が乾いていたので水やりしたことや、実が付いたので追肥したことなどの自分との関わりについても気付くことができる。



スタディーエックス スタイル

## StuDX Style

デジタル学習基盤で加速する深い学び

### 1. 各教科等における 深い学びの実践

各教科等  
での活用

慣れる  
つながる  
活用

STEAM教育等の  
教科等横断的な  
学習

#### 小学校



#### 中学校



#### 高等学校



#### 特別支援教育

特別支援



[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/mext\\_00015.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00015.html)



小学校第2学年 生活科「もっと大すき わたしたちの町」の事例（抜粋）

[https://www.mext.go.jp/StuDXStyle/20250620-mxt\\_kyoiku01-000015520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/StuDXStyle/20250620-mxt_kyoiku01-000015520_1.pdf)

## 小学校第2学年 生活科 「もっと大すき わたしたちの町」

### ■単元の目標

自分たちの町を探検する活動を通して、地域の人や場所の存在や友達に伝えたいことを考え、地域での生活や様々な人や場所と関わっていることや他者と関わることのよさに気づき、**地域に親しみをもって生活したり、他者と進んで交流したりすることができるようにする。**

### ■単元の概要

春の町探検を振り返ったり探検したりして、もっと町を知りたい、友達に大好きな町を伝えたいと思いや願いを高め、友達と一緒に発見したことを写真を見ながら伝え合う。

### ■単元の指導計画（22時間）

#### 第1小単元

- 「もっとたんけんして、なかよしになろう」
- ・春の町探検を思い出す
- ・グループごとに探検の計画を立てる

#### 第2小単元

- 「町をたんけんしよう」
- ・グループごとに町を探検する
- ・身近な人にインタビューする
- ・発見したことを伝え合う

#### 第3小単元

- 「町の大すきをつたえあおう」
- ・大好きなことを伝える方法を考える
- ・わたしたちの町大すきランドを開く

#### 第4小単元

- 「今までのたんけんをふりかえろう」
- ・春と秋の町探検を振り返る
- ・探検カードを使って、町の〇〇をつくる

### ■小単元の概要

春の町探検やこれまでの出来事を振り返り、町探検への興味・関心を高めながら町探検グループを編成する。グループでの対話を通して、行ってみたい場所や見学やインタビューしたいことなどを計画する。

グループごとに町探検に行き、町で生活する人や商店などで働く人などにインタビューする。不思議なことや発見したことを、自分や同じグループの友達、教師が撮影したクラウド上の様々な写真を使って、友達と伝え合う。

町の大好きを知らせたいと思いや願いの実現に向け、絵本、紙芝居、劇などの表現方法を考え、友達同士で町を探検するように楽しみながら町の大好きを紹介し合う。

春と秋の町探検やそれを伝え合ったことを振り返り、町の場所や人、出来事が自分にとって関わりがあることに気づき、これからも町となかよくなろうとする。

### ■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（第2小単元）

#### 【学習活動の場面】

クラス全体で撮影した写真を使って、発見したことを友達に伝える活動を行う。教師は「町探検したことをペアになって友達に伝えましょう。気付いたことを先生やグループの友達が撮影した写真も見ながら話しましょう。」と投げかけ、さらに「交流すると、もっと町のことが分かりそうだね。」と目的を明確にした。

#### 【子供の「深い学び」の姿】

最初、Aは端末で写真をBに見せながら、町探検で最も気に入ったコーヒー屋の様子について紹介した。

A「これが乾いたコーヒー豆で、これを潰してコーヒーの粉にします。この写真を並べてみると、色も形も全然違うことが分かるでしょ。」と説明した。

B「コーヒーになるまでに色んなことをしているんだね。僕が探検した八百屋のHさんは、お客さんに旬な野菜の食べ方を笑顔で話していたよ。」と伝えた。

Bの「笑顔」という話を聞いたAは、コーヒー屋や他のお店でも笑顔の店員がいたことを思い出し、「**お店の人は笑顔で接客していることが多いかも。**」とつぶやいた。そして、教師や同じグループの友達が撮影した笑顔の写真を再度探して見付け、それらを見せながら、

A「**コーヒー屋のYさんも笑顔でお客さんと話していたよ。**お客さんにコーヒーの好みを聞いて美味しい豆を選んでいるんだって。Yさんはお客さんがコーヒーの匂いを嗅いで笑顔になる時が嬉しいと言っていたよ。他のお店でも笑顔の店員さんがいたよ。YさんもHさんも私たちの町の店員さんは皆、色々な工夫をしながら、**笑顔でお客さんと接して、お客さんが気持ちよく買物ができるようにしているね。私たちの町のよいところだね。**」と語った。

#### 【当該指導での「深い学び」】

Aは、Bとの対話から、八百屋もコーヒー屋も、笑顔で接客していることに気付いた。またクラウド上の様々な写真を手掛かりにして振り返り、多くの店舗の店員が品物売る工夫だけでなく、笑顔で接客していることに気付いた。このようにして、「**笑顔に象徴される相手を思いやる行為や態度によって、自分たちの生活が豊かなものになるよう支えられていることをさらに実感し、自分たちの町のよさを再認識することにつながった。**」

### ■指導上の工夫とICTの利活用

①全体で伝え合いを行うイメージをもつ。  
\*伝え合いを行う場面をイメージしやすいように説明することで、期待感を高める。

②クラウド上の写真を必要に応じて活用できるような伝え合い活動とする。

\*用意したプレゼン資料だけで説明するのではなく、ペアの質問に応じて、自分や同じグループの友達、教師の撮影した写真も振り返ることができるよう、クラウド上で写真を共有しておく。これによって、対話の中で気付いた事柄に応じて、いつでも写真を振り返ることができ、町探検での気づきを深めることにつながる。

③友達との伝え合い活動を生かし、感じたり考えたりしたことを説明する。

\*伝え合うことで、一人では気が付かなかったことに気が付いたり、それぞれが気付いたことを関連付けたりできるように、感じたことや考えたことも伝え合う活動とする。

【活用したソフトや機能】 ロイロノート